

山房の夜雨

木下犀潭

林葉風に飄つて琵琶として鳴る

虚窓唯見一燈の明らかなるを

人間多少功名の夢

化して作る山房夜雨の声

【作者】木下犀潭(一八〇五〜一八六七年)(文化二年〜慶応三年)日本の武士・儒学者・熊本藩士。名を業広(なりひろ)、通称宇太郎(うたろう)、後に真太郎(しんたろう)、字は子勤(しきん)、号は犀潭(さいたん)、韓村(いそん)肥後国菊池郡の農家に生まれる。天保六年(一八三五)に昌平黌、また佐藤塾にて佐藤一斎に学ぶ。同じ熊本生まれで農民出身である松崎謙堂にも教えを受ける。ここで塩谷岩陰、安井息軒と知り合い、終生の親交を結ぶ。六十二歳没

【語釈】\*山房:山中の庵室。 \*瑟瑟(しつしつ):さびしげに冷たく吹く風の音の形容。 \*虚窓(きよそう):人けのない部屋の窓。 \*化(か)して:形や性質が変わって別のものとなる。かわる。変化する。

【通釈】落葉秋風に舞つて、風の音も寂しく、窓の前には唯一灯のあかりがあるのみ。功名を争う人間の欲望も、天地寂寥の大自然の間に在りては、夜雨の声と共に去つてしまふ。

【備考】○夜雨心に沈みて人間の煩惱を洗うと、山中の静かなる庵室にて感慨を述べたもの。